

自治自立の心構え

奨励	大谷 實【おおや・みのる】
奨励者紹介	同志社総長

主はこう言われる。
「さまざまな道に立って、眺めよ。
昔からの道に問いかけてみよ
どれが、幸いに至る道か、と。
その道を歩み、魂に安らぎを得よ。」
しかし、彼らは言った。
「そこを歩むことをしない」と。

(エレミヤ書 6章16節)

はじめに

私は、現在、学校法人同志社の総長をしていますので、少しだけ紹介しますと、同志社には、同志社大学、同志社女子大学のほか、四つの高等学校、四つの中学校、二つの小学校、幼稚園、それから、すべて英語で教えるインターナショナル・スクール、併せて14の学校がありまして、全部で4万3000人が学んでいます。どの学校も、キリスト教主義、自由主義（自治自立主義）、国際主義という三つの考え方に立って、良心教育を行っています。

今日は、新入生の皆さんが、これからの学生生活で、何を目標として、また、どういう心構えで生きていけばよいのかということについて、私の人生経験を踏まえて、短い時間でけれどもお話できれば幸いと考えています。

絆と共生

4年前の東日本大震災をきっかけとして、いろいろなことが言われてきました。これまでの「物質文明の時代」、経済中心の社会から「心の時代」人間の生き方を大切にする社会へと変わらなければならない。また、共に生きる、つまり「共生」ということを大切にする社会を作らなければならないとも言われてきました。もう一つ、「絆」を大切にする社会を作ろうとも言われました。かつて流行語となったものです。では、そもそも「絆」とは、どういう意味なのでしょう。

皆さんもご存じのように、絆とは、「人と人との結びつき」のことでありまして、災害といった不幸に出遭ったときには、人と人との結びつきを通じて、連帯共助の精神で生きていかなければならないのですから、お互い人と人との繋がり、絆を大切にして、共に連帯して助け合って生きていこうというのが、流行語となった理由だと思います。しかし、私は、今のままの日本人の生き方では、時間が経過すると共に、絆とか、共に生きるという意味での共生、さらに連帯共助といった考え方は、ボランティア精神に燃えている方は別として、一般の人は、すぐに忘れてしまうのではないかという気がしてならなかったのです。そして、その傾向は現実になっている感じがいたします。

何故、こんなことを申すかと言いますと、私は、絆とか共生、あるいは連帯共助といった社会は、一人ひとりの人間としての「生き方」がちゃんと決まっていないと、成り立たないと考えるからです。私たち日本人のこれまでの考え方、生き方を見ますと、すべての方がそうとは申しませんが、先ほど触れましたように、物質文明、お金優先、少しでも経済的に豊かになることが人生の目標とされてきたように思います。ですから、絆や共生、連帯共助という時も、お金、経済的な損得を通じて考えられてきたのではないのでしょうか。「頑張り、日本」といわれる時も、その念頭にありますのは、物質的支援が中心だと思います。もちろんそれが大切であることは否定しませんが、しかし、本当に必要なのは、それぞれが自分の人生の目的をもち、それに向かって着実に進む、その歩みを支え合うことなのではないのでしょうか。本当の絆は、お金を通じての結びつきではなく、お互いが人間として成長するための心の結びつき、連帯共助の精神ではないかと思うのです。

個人主義の定着

かつて、ある雑誌で、東日本大震災で何を学ぶべきかと問われたことがあります。私は、迷わず、個人主義が社会に根を下ろすことが大切だと答えました。私は、今日の社会の混沌振りを見て、これから申しあげる「個人主義」が日本の社会に定着していれば、こんなに混乱することはなかったのではないかと思ったのです。

では、個人主義とはどういう意味なのでしょう。個人主義という言葉は、もちろん皆さんもご存じかと思うのですが、残念ながら、今は余り使われていないようです。個人主義は利己主義に通ずるというので、一般の評判も良くないようですが、特に政治家は、個人主義の考え方のために、若者たちが自分の好き勝手のやりたい放題の無責任社会を作り出していると言って、個人主義を攻撃しています。しかし、私は、このような個人主義の理解は、間違っていると思います。そもそも個人主義といいますが、社会生活の上で、国や社会の利益を優先させてはならず、何よりもAさんとBさんといった具体的な一人ひとりが、自分の人生は自分で決め、自分の力でやり抜くという、自治自立の生き方を国が保障するという原則なのです。言い換えますと、国や社会は一人ひとりの個人から成り立っているのですから、大切なのは一人ひとりの人間、つまり個人であり、したがって、この個人の人生を何よりも大切に、他人に迷惑をかけない限り、お互いの人生を最大限に尊重しなければならないという考え方なのです。

国の形

日本史で勉強されたと思いますが、1945年に日本が戦争に負けるまで、日本では、天皇陛下や国が大切であって、人間は天皇に仕える家来（臣）であり、お国のために働くことが最も重要であると考えられてきました。こういう社会を国家主義、天皇中心主義というのです。こうした考え方が日本を軍国主義の国家にしてしまい、国民を戦争に巻き込み、何百万人という犠牲者を出すことになったことは、皆さんご存知のとおりです。そして、戦争に敗れて、これまでの国のあり方、国民の生き方を根本から反省しまして、1946年に憲法を作り直しました。日本の国の形を、国中心の社会から、180度変えて個人中心の社会に作り直そうとしたのです。言い換えますと、天皇陛下や国家を最も重要とする考え方から、一人ひとりの個人の人生を大切にする個人主義の社会を作ろうとしたのです。

私は、小学校の5年生の時に終戦となり、6年生の時に新しい憲法ができたのですが、それから暫くは、新聞などでも個人主義が随分と持て囃されました。しかし、世の中がだんだん変わってきて、経済的に豊かな社会、いわゆる高度経済成長を最も大切にする社会にとって、個人主義は邪魔になってきました。個人個人の生活より、国や社会を経済的に豊かにすることが至上命令になり、個人主義は、いつの間にか社会から敵視されるようになってしまったのです。これは、とてもおかしい話です。

個人主義を定めたのは、実は日本の憲法なのです。憲法の13条は、「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」と定めて、高らかに個人主義を宣言したのです。それぞれの幸福、生き方を最大限尊重する社会を作る、いわゆる「幸福追求権」を保障したのです。これは、日本人にとって画期的なことだったのです。

混沌の時代

それがいつの間にか色あせてしまい、一方では、個人主義は自分さえ良ければよいといった利己主義に通ずると言われ、また、人々はひたすら豊かさだけを求め、経済成長にばかり気をとられて、人生、何を目的として生きていけばよいのかといった大切なことに心を砕いてこなかった。残念ながら、69年前に日本の憲法を作ってから、個人主義は、国民の日常生活に根付くまでには浸透してこなかったのです。豊かさだけを求めてひたすら走っている間に、人間としていかに生きていくべきかが分からなくなってしまい、迷いの時代、混沌の時代に入ってしまったと言われています。私も本当にそうだと思います。国民の多くは、「何を目標にして人生を歩むべきか」ということについて、思い悩んでいるのではないかと。

そうである以上、私たち一人ひとりは、原点に立ち返って、自らの人生は自ら切り開き、自ら決めるという、自治自立の心構えを自覚すべきではないでしょうか。私は、つくづくそう考えるようになりました。その際、二つのことを忘れないようにしていただきたい。一つは、憲法がいつている幸福追求ということ。憲法は、幸福とは何かについては、何も教えてくれません。何が幸福であるかは、それぞれが自分で決めるものだからです。したがって、どういう生き方が幸福になれるかということは、自分ではっきりとさせておくべきだということです。もう一つは、自分の良心に従って生きる「自治自立の人間」を目指すということです。

良心に従う

良心に背いて生きるところに幸せは絶対に訪れないからです。ちなみに、良心という言葉は、もともと中国の儒教からきたもので、「何が善であり、悪であるかを知らせ、善を命じ悪を斥ける心」と説明されていますが、とても難しい言葉です。良心は、皆さんもご存じのように、英語でconscienceというのです。conは一緒にという意味です。scienceはサイエンスつまり科学ですが、知るという意味です。私は、祈りを通じて、神様と共に考え、神様の導きに従って行動する心が良心だと思います。要するに、祈りを通じて行動する心が大切だと考えています。

自ら治め、自ら立つ、自治自立の心構えで、自分の人生は自分で決め、自らの力で人生を切り開き、迷うことなく邁進する人生をおくる、そのような強い心をもっていただきたいと願うばかりであります。大学生活のスタートを切るに当たって、「自治自立の心構え」が大切であることを申しあげて、本日の奨励とします。

